

《大審問官》における「長広舌と沈黙との対話」

泊野竜一

1. 《大審問官》の特異性

『カラマーゾフの兄弟』の中の《大審問官》と題されている一節は、いわば劇詩¹とも呼ぶべき独立した作品の体を成している。ローザノフ、ベルジャーエフなどはもっぱら、宗教的・哲学的な立場からこの「作品」に対して評価を行っている。現代においても3.ミールキナ、B.バチーニンなどによる同様の立場からの論評があり、この傾向は依然として強い。しかし筆者は、《大審問官》を、純粹に文学的な視点から評価し、その表現方法が大きな意義を有することを明らかにしようとする立場に立つ。

《大審問官》の中で最も着目すべき点は、大審問官と、キリストと思しき人物(以下キリスト)との二人の対話の表現形式である。この対話で大審問官は、一方的な長広舌を揮うが、キリストは文字通り一言も発言せず、終始沈黙を守って聞き手に徹する。一般にドストエフスキーの作品には、饒舌な人物が数多く登場するが、《大審問官》の中のキリストのように、沈黙に徹する人物が登場することは、『カラマーゾフの兄弟』の無視し得ない特徴である。複数人物の発話によって展開するのではなく、ドストエフスキーが、対話者の一方に敢えて沈黙という表現を選択したその意図とその効果に注目したい。

そこでこのように、見かけ上、一人が一方的な長広舌を揮い、もう一人がそれに対して言葉で応答せずただ聞いている形式を持つものをも、一種の対話表現と捉え、それをここでは仮に「長広舌と沈黙との対話」と名付ける。

このキリストの沈黙と、「長広舌と沈黙との対話」とに関わる重要な先行研究を以下に挙げておく。

木下豊房氏は、『ドストエフスキー その対話的世界』²で、ドストエフスキーの対話表現、「沈黙の対話」³について述べている。しかし、木下氏が研究で扱ったのは、双方がともに言葉を発さない「対話」であり、本報告の、「長広舌」と「沈黙」の対比で生ずる新たなコミュニケーションの形式とは異なるものである。

バフチンの『ドストエフスキーの詩学の諸問題』でも、重要な考察が行われている。その箇所を以下に引用する。

隠された対話という現象は、我々の研究目的にとって特に意義深く、重要であり、隠された論争という現象と一致しない。その中で第二の対話者の反駁は抜けているが、全体的な意味は全く損なわれていないという、二人の対話を思い浮かべてみよう。第二の対話者はひそかに居合わせているが、彼の言葉は存在しない、しかしこの言葉の深い痕跡が最初の対話者のあらゆる実際の言葉を規定しているのである。たとえただ一人でしゃべってい

¹ イワンは《大審問官》のことを поэма または поэмка と呼んでいる。Достоевский Ф. М. Полное собрание сочинений: В 30 т. Т. 14. / АН СССР. ИРЛИ. Л.: Наука, 1976. С. 224, 225.

² 木下豊房『ドストエフスキー：その対話的世界』成文社、2002年、8-22頁。

³ 木下豊房『ドストエフスキー：その対話的世界』成文社、2002年、22頁。

るとしても、これが対話であり、そして、おのおの存在する言葉は全身全霊で応答し、目に見えない対話者に反応し、自らの枠の外で、自らの矩を超え、まだ発話されていない他者の言葉を示すので、対話は非常に緊迫していると感じられる⁴。

以上の指摘は、一方は話し、もう一方は沈黙する二者の間に隠された対話の存在を指摘している点で、極めて重要である。しかしバフチンは、中編小説『地下室の手記』などの詳細な分析と比較すると、長編小説における対話の取り扱いは手短に終わらせている。

M. エプシテインは、『検察官』、『桜の園』、『大審問官』を例にとり、沈黙と饒舌は相互に結びついた上でお互いを充実させる概念であると述べている⁵。この沈黙と饒舌とを対比させる着眼点は、本報告に関し極めて重要である。しかし、エプシテインは、実際のところ、大審問官の饒舌をモノローグ、「無意味な長談義 (словоизвержение)」⁶ と言い切っており、大審問官とキリストとの間には、対話は成立していないと考えている。さらに、作品の実例に即しての、詳細で具体的な分析を行っていない。

以上の先行研究を踏まえ、『大審問官』の中の「長広舌と沈黙との対話」、すなわち「長広舌」と「沈黙」との対比で表現されている対話の形式について着目し、あらためて詳細かつ具体的に検討し、その表現上の特徴を明らかにしたい。

2. 《大審問官》における「長広舌と沈黙との対話」の特徴分析

『カラマーゾフの兄弟』の中の《大審問官》における、大審問官とキリストとの対話を具体的に詳細に分析した。すると、「長広舌と沈黙との対話」には、次のような4つの特徴と思しきものが抽出される⁷。

聞き手の様子不明の特徴 (特徴 I.)

沈黙を守る聞き手は、徹底的に言葉を発しない。沈黙を守る聞き手の、心情的および外面的情報はほとんど描かれない。

長広舌強要の特徴 (特徴 II.)

対話の序盤では、一方的に長広舌を揮う話し手と、それを従順に聞く、沈黙を守る聞き手の間に一種の従属関係がある。長広舌の揮い手は、時には沈黙を守る聞き手の発言を制止し、バフチンの指摘するように⁸、聞き手の発言を先取りしてまで自らの会話を続けようとする。

⁴ Бахтин М. М. Проблемы поэтики Достоевского / Под ред. С. Г. Бочаров. 2-е изд., перераб. и доп. М.: Сов. писателя, 1963. С. 264.

⁵ Эпштейн М. Н. Слово и молчание в русской культуре // Звезда. 2005. № 10. С. 202-228.

⁶ Эпштейн М. Н. Слово и молчание в русской культуре // Звезда. 2005. № 10. С. 211.

⁷ 泊野竜一「《大審問官》における「長広舌と沈黙との対話」」2013年度早稲田大学文学研究科修士論文にて、これらの分析を行っている。

⁸ Бахтин М. М. Проблемы поэтики Достоевского / Под ред. С. Г. Бочаров. 2-е изд., перераб. и доп. М.: Сов. писателя, 1963. С. 306-308.

返答要請の特徴 (特徴 III.)

対話の序盤では、長広舌を揮う話し手は、沈黙を守る聞き手に対し、一方的に対話を続けていたが、中盤では、長広舌を揮う話し手が、沈黙を守る聞き手に対し、発言を促し要求する。それが終盤になるにつれ、長広舌を揮う話し手が、逆に沈黙を守る聞き手からの返答を乞う立場となる。

対話継続の特徴 (特徴 IV.)

二人の面会が終了し、お互いが別れて一人となったのちも、心の中では、ある種の内的対話が継続することが推測される。

3. 「長広舌と沈黙との対話」に至る対話表現の変遷

前章では、『カラマーゾフの兄弟』の中の、大審問官とキリストとの対話表現を分析した結果、抽出された4つの特徴を示した。では、その4つの特徴は『カラマーゾフの兄弟』以前には見られるのだろうか。ドストエフスキーにおいて、極端な饒舌と沈黙とがその特徴をなす作品としては、『地下室の手記』、『罪と罰』、『白痴』、『悪霊』、『未成年』が挙げられる。本論文では、これらの作品を別途分析し⁹、4つの特徴に照合して、結果を下の表にまとめた。特徴を完全に満たすものを○、不完全、部分的に満たすものを△、特徴が存在しないものを●とした。

作品	聞き手不明 (特徴 I)	長広舌強要 (特徴 II)	返答要請 (特徴 III)	対話継続 (特徴 IV)
『地下室の手記』 「僕」とリーザ ¹⁰	●	△	△	△
『罪と罰』 ラスコリニコフと ポルフィーリー (ДПСС 6. 257-264.)	●	△	△	△
『白痴』 ムイシュキン公爵と エパンチン將軍 (ДПСС 8. 261-262.)	○	△	△	△

⁹ 注7と同様。

¹⁰ Достоевский Ф. М. Полное собрание сочинений: В 30 т. Т. 5. / АН СССР. ИРЛИ. Л.: Наука, 1973. С. 171-175. これ以降、ДПСС 5. 171-175. などと表記し、本文中に示す。

『悪霊』 ワルワラ夫人と ダーシャ (ДПСС 10. 56-57.)	△	○	○	●
『未成年』 アルカージーと カテリーナ (ДПСС 13. 204-205.)	○	○	○	●
『カラマゾフの兄弟』 大審問官と キリスト (ДПСС 14. 228-237.)	○	○	○	○

表. ドストエフスキーの小説に登場する「長広舌と沈黙の対話」の特徴の検討

記号. ○：特徴を完全に満たす △：不完全、部分的に満たす

●：特徴が存在しない

表から、以下の結果が導き出される。

それぞれの作品が、「長広舌と沈黙との対話」の特徴をどのように満たしているかを検討すると、「長広舌と沈黙との対話」は、試行錯誤を繰り返しつつ、時系列的に発展し、《大審問官》の行阮形式に達したものであることを、読み取ることが可能だろうと思われる。

4. 結論

ドストエフスキーは、長広舌の揮い手と、沈黙を守る聞き手との間で起こる、通常の対話よりも豊かな、新たな対話表現の可能性を《大審問官》において示した。そして、その表現方法は、『地下室の手記』や後期長編小説で紆余曲折を経て、徐々に発展してきたものである。

このようなドストエフスキー作品における対話表現の特徴のうち、対話継続の特徴については、ドストエフスキー研究において重要な意味をもつと思われるので、今後、別の機会を得て、更に詳細に述べていくことにしたい。

(とまりの りょういち・早稲田大学大学院生)